

## 分析哲学講義

青山拓央，ちくま新書 944 (2012)

007 私たちは、何を論じる際にも言語に依存しています。何を観察する際にも、言語を通して世界を見ます。分析哲学の独自性は、この当たり前の事実を徹底的に掘り下げる点にあります。  
[C] これを当たり前の事実と見るところに分析哲学の根本的誤謬がある。

### I. 分析哲学とは何か

014 分析哲学の手法の独自性はどこにあるのでしょうか。それは、言語を基礎的で自律的なものと見なし、言語のメカニズムの解明によって他のメカニズムを説明していくところにあります。分析哲学史における「言語論的転回」(linguistic turn)と呼ばれているのは、この逆転の発想です。

誤解を恐れずに言えば、まず世界があってそれを言語が写し取るという直観ではなく、言語があってそこから世界が開かれるという直観が、分析的手法を支えています。(控えめな論者なら世界が開かれるとまではいわず、言語のしくみを見ることで哲学的混乱が解消される、というにとどめる)

[C] この転回が躓きのもとであるが、しかし、言語がまったくない場合に世界は開かれないか? 進化論的に考えるとき、そういうことはない。

015 言語が主役に躍りでることで真に追い出された顔いうと、それは一人称的で構成主義的な観念論の考えです(=「時計を見ているという経験とともに時計が「構成される」)。

016 「私が世界を開く」という見方から「言語が世界を開く」という見方への転回することもできます。

021 言語は人間の主観的なものであるから、客観的な自然の在りかたとは関係がない—。こうした考えの持ち主もやはり、人間のあらゆる認識が言語なしには成立しないという事実を軽視しています。のちの講義で触れる通り、科学的な実験・観察さえ、言語的な構成物としての理論なしには実行できません。

[C] 理論が言語なしでは作れないように述べるが、それ以前の自然知能的な広大な部分なしにはすべてが不可能であることに思いを致すべきだろう。さらに、言語は間主観的に共通であると暗黙に了解している節がある。

023 分析哲学は何でも分析できるが、森羅万象についての分析はつねに言語についての分析を経ており、言語そのものが分析対象として意識される。

[C] もちろん根本的誤謬が前提になっている。

### 2. 意味はどこにあるのか

[C] それはアダプターにある。

039 「アセロラの実が赤い」という文の意味が、この文に結び付けられた私の何らかのイメージだとするなら、この文は客観的な意味を持ってないでしょう。私は、私のイメージそのものを他人に伝えることはできませんし、また、自分のイメージと他人のイメージを見比べることもできません。

[C] はたしてそう単純に割り切っているか。MDS がしめすように、そうではないのだ。(た

だし具体的なイメージでなく概念の組として集合的に近似する)

040 今問題になっているのは、意見の客観性でも、事実の客観性でもなく、意味の客観性であることに注意してください。「アセロラの実は赤い」という文の意味が客観的かどうかの問題なのです。

045 意味のイメージ説にはイメージが比較できないという大きな難点(私秘的であるという難点)があるが、たとえそれが比較できたとしてもそれ以外の重大な難点がある。それはイメージは概念でなく「具体的夾雑物」を含むからである、何を実際さしているのか意図がわからない。

[C] もちろん、すでにうえにのべたように、MDSはさきにそれをこえている。

049 Wittgensteinはイメージ説への批判を述べるが、そのひとつがルール読みとりの非一義性であった。ただ一つの規則だけを強制的に読みとらせるイメージなどない。

051 [C] この手の批判は全く同じでないものでほかのものを指し示そうとするときには避けられない。

052 私秘的空間から追い出された意味は公的空間へとやってくる。それは如何なるものとして公的空間に置かれるのか？具体的指示対象物としておかれるというのが意味の指示対象説である。普遍者からなる世界の存在を認めないなら意味の置き場は物理的世界ということとなる。しかし、指示対象説にとっては抽象的概念は厄介な代物である。[C] 抽象概念がより根源的である。したがって抽象概念の置き場に困ることはない。

### 3. 名前と述語

076 ラッセルによれば、固有名もただ一つの実在的对象を指し示す表現ではない、固有名とは本当は、省略された確定記述である。つまりさまざまな「～であるようなもの」という記述をならべる代わりであるにすぎない。「being 固有名詞」という述語で記述される対象。

082 存在するとは検索の対象になり得ることだ「存在とは変更の体になりうることだ」。言語と無関係な「実際にあるもの」の探究などありえない。

[C] もちろん言語論的転回の誤謬の例である。

### 4. 文脈原理と全体論

089 「論考」では「世界は事実の総体であり、ものの総体ではない」つまり、文は語に先立っている。その先立ち方は世界の在りかたと一体化している。

094 論理実証主義者が経験的真理と言語規則・論理規則のみに基づく進路との二種類があると考えた。

[C] もちろん単純すぎる。あとに書いてあるように(p105)クワインはこれを否定した経験的と非経験的真理は区別できない。

101 理論負荷のない観察はない。

[C] しかし実際には phylogentic learning を考えなくてはいけないので、経験負荷のない理論

はありえない。ではどちらが根源的か？ 当然理論など昔はなかったのである。  
化学全体は「境界条件が経験である力の場」のようなものであり、「周縁部での経験との衝突は、場の内部での再調整をひきおこす」。  
[C] これはなかなかいいアナロジーであるが、根本的に忘れていることがある。それは場を支配する方程式そのものである。それも経験からしか来ないのである。